# 「高度実践看護師（APN）コース 高齢がん患者の治療とケア」の実施と評価
## －受講生のニーズに伴うプログラム修正の具体と実施・評価－

森本悦子[1)]、藤田佐和[2)]、門田麻里[3)]、庄司麻美[4)]

（2019年９月26日受付，2019年12月16日受理）

# Program implementation and evaluation of “Advanced Practice Nurse（APN）course treatment and providing care for elderly cancer patients”
## —Specific, implementation and evaluation of program modifications according to students' needs—

Etsuko MORIMOTO[1)]，Sawa FUJITA[2)]，Mari KADOTA[3)]，Mami SYOUJI[4)]

（Received：September 26. 2019，Accepted：December 16. 2019）


## 要　旨

「高度実践看護師（APN）コース 高齢がん患者の治療とケア」は、専門看護師や認定看護師を対象に、高齢者のニーズに対応できる高度な実践能力を育成することを目的に行った。高齢がん看護における看護師の高度な実践能力とは、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力であると考え、これらの能力を培うための授業科目を検討し４科目で構成した。そして本プログラムは受講者各々の実践上の課題や学びへの期待に沿った内容に改変したことによって、高齢がん看護実践への新たな知識や技術の習得のみならず、受講生相互の協働した学びを進める中で、自らの実践を内省し、看護専門職者としての自己肯定感を高めることができたと考える。今回実施したプログラムの教育効果や評価に基づいて、今後はさらに洗練化させた内容としていきたいと考える。


キーワード：高齢がん看護、高度実践看護師、教育効果


## Abstract

The “Advanced Practice Nurse（APN）course on treatment and providing care for elderly cancer patients” targets certified nurse specialists and certified nurses and aims to cultivate high-level practical skills that enable them to address the needs of elderly cancer patients. We considered potential classes and focused on four subjects to foster these skills, which involved the ability to take a highly specialized, comprehensive approach that effectively applies theory and knowledge to nursing practice. Participants of this program obtained renewed knowledges and skills, and they could reflected on oneself and got self-esteem as professionals through some group works. We plan to further refine the contents of the program based on the educational effects and evaluations obtained in the present study.


Key words: elderly cancer nursing, advanced practice nurse（APN）, educational effects

1）高知県立大学看護学部看護学科 教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor
2）高知県立大学看護学部看護学科 教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor
3）高知県立大学看護学部看護学科 特任助教
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Project Assistant Professor
4）高知県立大学看護学部看護学科 助教
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor

## Ⅰ．はじめに

本学は、文部科学省平成29年度 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル、以下がんプロ）」養成プランに採択された、中国・四国の11大学による「全人的医療を行う高度がん専門医療人養成」事業による教育を行っている。本事業は、ライフステージやがんの特性を考慮して、がんとともに生きる人とその家族の健康と生活に関わるニーズに応えられる専門性の高い実践ができる看護師の養成を目的としたリカレント教育としている。平成30年度は「高齢がん患者の治療とケア」をテーマに、高齢がん患者のケアに携わる専門看護師や認定看護師を対象に、本学がんプロメンバーでプログラムを開発し、教育コースを実施した。

我が国では人口の高齢化に伴って患者に占める高齢者の割合も増加し、地域がん登録では、2011年にがんに罹患した患者の約69％が65歳以上であると推計されており、その割合は年々増加傾向にある。このような状況を踏まえ、本教育コースでは高齢がん看護に携わる看護師が、高齢がんの診断や治療に関する知識、高齢がん看護に関する専門的な知識と技術を学び、がんをもつ高齢者のニーズに対応することのできる専門性の高い看護実践能力を育成することを目的としたプログラム構成とした。

本稿では、平成30年度「高知県立大学がん高度実践看護師コース 高齢がん患者の治療とケア」の実施内容およびその評価について、とりわけ受講生の９割以上を占めた認定看護師の資格を有する受講生のニーズに沿ったプログラム修正の具体と実施および評価を報告する。

## Ⅱ．倫理的配慮

研修開始時のオリエンテーションにおいて、研修内容やがんプロの成果について紙上や学会等において報告を行うこと、研修で実施するアンケート結果については報告内に使用する可能性があること、その際のプライバシーの保護についてなどを、文書を用いて口頭で説明し、同意を得た。なおこれらの倫理的な配慮実施においては、高知県立大学研究倫理委員会の承認（看倫18-51）を得た。

## Ⅲ．「高知県立大学がん高度実践看護師コース 高齢がん患者の治療とケア」の概要

### １．教育目的･目標

１）教育目的

本教育コースは、すでに実践で活躍している高齢がん患者のケアに携わる専門看護師や認定看護師を対象に、がんを持つ高齢者のニーズに対応できる高度な実践能力を育成することを目的とした。

がん看護における看護師の高度な実践能力とは、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力であると考え、これらの能力を培うための授業科目を検討し、４科目60時間（８日間）で構成した。

２）教育目標

授業科目は「高齢がん看護基盤論」「高齢がん診断治療学」「高齢がん看護実践論」「高齢がん看護展開論」の４科目で構成し、科目ごとに教育の達成目標を設定した。

（１）高齢がん看護基盤論

①高齢者の加齢に伴う身体的、心理的かつ社会的な特徴を理解する

②高齢がん患者への看護の基盤となる諸理論、ならびにその活用法について理解する

③高齢者の権利擁護について理解し、倫理的思考に基づく看護の役割について説明できる（含：高齢者を取り巻く医療環境が抱える課題と戦略）

（２）高齢がん診断治療学

①高齢者の加齢に伴う諸問題を医学的な観点から理解する

②認知症の診断・治療のプロセスとそれに伴う患者の反応および支援について説明できる

③高齢がん患者の治療過程における看護援助について説明できる

（３）高齢がん看護実践論

①高齢者の特徴を踏まえ、高齢がん患者と家族を包括的にアセスメントできる
②高齢がん患者の家族の特徴を理解し、看護援助を提案することができる
③高齢者の社会的な支援・施策を理解し、質の高い生活を支援する方策を考案できる
（４）高齢がん看護展開論
①高齢がん患者の治療及び生活の場の特性を踏まえた看護援助を考案できる
②高齢がん患者と家族の意思決定を支える看護について説明できる
③複雑な課題を抱える高齢がん患者に対して、既習した理論を活用した看護援助モデルを考案できる

### ２．授業科目の概要

本プログラムは講義と演習で構成されており、４単位60時間（８日間）の履修を必要とする。授業科目･時間数と授業概要については表１に示した。

平成30年度の受講者は、計29名（学外より22名＋本学大学院生７名）であった。

## Ⅳ．プログラム受講生の背景やニーズに伴うプログラム修正

### １．受講生の背景

学外からの受講生の内訳は、がん看護専門看護師２名と認定看護師20名（がん看護領域：18名、その他の領域：２名）であり、全員が中四国地区からの参加であった。

### ２．受講の動機

受講生の大半が認定看護師であったため、予定した教育内容と達成目標を、受講生、とくに認定看護師である受講生のニーズに即した内容に修正する必要性があると考えた。そのため認定看護師

表１．授業科目の概要

| 科目名 | 授　業　概　要 |
|---|---|
| 高齢がん看護基盤論<br><br>1 単位 15 時間 | 高齢者の身体的、心理的かつ社会的な特徴を理解すると共に、健康な高齢者の加齢に伴う成り行きとそれに関わる要因を踏まえ、高齢がん患者への看護実践の基盤となる諸理論と、高齢者の権利擁護および倫理的思考について学修する。<br>・老年学と老年看護学における諸理論<br>・高齢者の健康生活/心理・社会的機能評価およびアセスメントと看護援助<br>・複雑な健康問題（心不全、COPD を含む）をもつ高齢者への包括的アセスメントと看護援助<br>・高齢者への看護にまつわる倫理的課題とアプローチの実際<br>・継続した高齢者看護における課題と戦略 |
| 高齢がん診断治療学<br><br>1 単位 15 時間 | 高齢がん患者の特徴を踏まえたがん治療および診断の実際について理解し、高度実践看護師として、エビデンスに基づいて高齢がん患者への看護のアプローチを提供する能力を獲得する。また認知症に関わる診断および治療についての理解を深め、認知症を持つ高齢がん患者の看護実践への適応について考察する。<br>・高齢がん患者の治療の現状と課題<br>・高齢者の薬物療法<br>・高齢者に対する心理社会的支援<br>・認知症における診断<br>・高齢者への緩和医療とチーム医療 |
| 高齢がん看護実践論<br><br>1 単位 15 時間 | 認知症をはじめとする高齢者特有の機能および病態の理解を踏まえ、高齢がん患者の生涯を視野に入れた、生活の質向上を目指す高度な看護実践に応用するための基盤を学修する。<br>・高齢がん患者の看護における現状と課題<br>・高齢がん患者の家族への看護援助<br>・高齢者への社会的支援、最新の施策の実際と課題<br>・終末期の高齢がん患者への看護と課題<br>・高齢がん患者の全人的アセスメントと看護援助：身体的側面<br>・高齢がん患者の全人的アセスメントと看護援助：心理社会的側面 |
| 高齢がん看護展開論<br><br>1 単位 15 時間 | 科目 1～3 の学修を踏まえて、高度な看護実践を展開できる能力を獲得し、高齢がん患者への看護援助モデルを考案する。<br>・高齢がん患者の療養生活を支援する看護実践Ⅱ（在宅緩和）<br>・高齢者がん患者の療養生活を支援する看護実践Ⅰ（外来看護、移行支援）<br>・高齢がん患者と家族の意思決定支援<br>・複雑な課題を抱える高齢がん患者への看護援助 |

である20名の受講申込書の受講動機欄の記載内容から、受講生の高齢がん患者への看護実践における課題および学びへの期待を抽出した。

結果、認定看護師である受講生らの課題として32の内容が抽出され、意味内容からがん治療に関する高齢者への支援、高齢がん患者への意思決定支援、高齢がん患者のQOLを維持する支援、高齢がん患者の家族支援、疾病構造や加齢変化に伴う支援の５つが明らかとなった（表２）。

また、学びへの期待は８つの内容が抽出され、それらは「高齢がん患者に関する専門的知識の獲得」「意思決定支援の方法」「高齢がん患者へのケア技術の習得」の３つにまとめられた（表３）。

### ３．プログラムの修正

本プログラムは、「高齢がん基盤論」「高齢がん診断学」「高齢がん看護実践論」の３科目の学修を踏まえて、「高齢がん看護展開論」にて演習を行い、看護実践の展開や高齢がん患者への看護介入モデルを考案することを目標においていた。しかし、受講生の受講動機を分析した結果（表２、表３）、受講生が、認定看護師として高齢がん患者への看護に関わる「実践」「指導」「相談」を担う役割を果たすために、課題や期待により直接的にアプローチできるプログラム内容へと改変することとした。

分析の結果明らかとなった５つの課題は、高齢がん患者へのより具体的な「実践」課題であると捉え、「高齢がん看護展開論」の科目において、達成目標③を「複雑な課題を抱える高齢がん患者に対して、既習した理論を活用した看護援助を考案できる」とし、授業の達成目標と内容を変更した。

## Ⅴ．「高齢がん看護展開論」の展開

### １．授業の目標と展開

新たな目標として、受講生各々が具体的な看護実践を検討しながら、自らの力を獲得できるよう、授業のなかで具体的な事例を挙げ、グループワーク（以降、GW）を行い、それらを検討・発表することにより、メンバーが日常の実践においても体

表２．受講生（認定看護師）の看護実践における課題

| カテゴリー | 小カテゴリー |
|---|---|
| がん治療に関する高齢者への支援 | がん化学療法を受ける高齢がん患者のセルフケア支援に困難を感じる |
| | がん化学療法を受ける高齢者の有害事象に対するアセスメントに困難を感じる |
| | がん化学療法や手術を受ける高齢者に行うべき看護について悩む |
| | がん放射線療法を受ける高齢がん患者のセルフケア支援に困難を感じる |
| 高齢がん患者への意思決定支援 | 認知症のある高齢がん患者への意思決定支援に困難を感じる |
| | 高齢者の意思を尊重した意思決定支援ができていないと感じる |
| | 治療に関する意思決定支援に苦労している |
| 高齢がん患者のＱＯＬを維持する支援 | 高齢がん患者のＱＯＬを保つための支援や、専門的知識の必要性を感じる |
| | 高齢がん患者がその人らしく生活できるような支援の必要性を感じる |
| | 治療の継続とその人らしい生活の維持への支援の必要性を感じる |
| 高齢がん患者の家族支援 | 家族看護が十分にできていないと感じる |
| | 家族構成の特徴から生じる支援の困難さを感じる |
| 疾病構造や加齢変化に伴う支援 | 多重疾患や加齢による特徴を考慮した支援に困難を感じる |
| | 症状の評価やマネジメントに困難を感じる |

表３．受講生（認定看護師）の学びへの期待

| カテゴリー | 小カテゴリー |
|---|---|
| 高齢がん患者に関する専門的知識の獲得 | がん化学療法の知識<br>高齢がん患者の特徴や理解<br>高齢がん患者に対する知識 |
| 意思決定支援の方法 | 意思決定支援や療養を支えるための具体的な方法<br>高齢がん患者の意思決定を支援できる専門性の高い知識と技術 |
| 高齢がん患者へのケア技術の習得 | 高齢がん患者への具体的なケア<br>高齢者に特化した支援内容<br>高齢がん患者に関する専門的な知識と看護援助技術 |

験する困難や課題、そして解決策などを含めて共有できるよう授業内容を変更した。

## ２．事例

事例は、高齢がん患者の抱える看護上の問題の特徴が含まれている３事例、①終末期における意思決定支援に課題がある事例、②軽度認知症がありがん治療に伴う有害事象へのセルフケアに課題がある事例、③複合的な疾患を抱えている事例をプロジェクトメンバーにより検討しながら、作成した。

## ３．グループ編成

受講生はがん領域をはじめ多くの分野の認定看護師であったため、分野が偏らないように希望する事例を事前に聴取し、４～５名で１グループを編成した。結果として各事例２グループが担当することとなった。

## ４．授業展開

GWでは、プログラム前半で既習した諸理論を用いて分析を進めることを前提として、以下の内容を提示し、GWによる諸点の検討、発表資料作成に向けた学習を促した。

①事例の患者について、高齢者の特徴をふまえた全人的な検討（身体的かつ心理社会的側面からのアセスメント）を行う。

②①により焦点化した援助の方向性を基盤として、看護目標、看護援助計画を立案し、グループワークの発表により受講生全員で学びを共有する。

時間配分としては、①、②で併せて８時間（４コマ）を充てた。

## ５．プログラム終了後の受講生による評価

本プログラムは、「高齢がん基盤論」「高齢がん診断学」「高齢がん看護実践論」の３科目の学習を踏まえて、「高齢がん看護展開論」にてGWを用いた演習を行い、既習した理論を活用した看護援助を考案できることを目標においた。そして各科目の学修後、達成度を評価する自記式アンケートを実施した。自由記載内容も評価の対象とした。

本稿では、事前に集約した受講生のニーズに沿って改変し実施した「高齢がん看護展開論」の評価について、認定看護師の資格を持つ20名について抜粋して示す。

①目標達成度の評価指標

「高齢がん看護展開論」の授業目標①～③の達成度を、「４：十分できた」～「１：まったくできなかった」の４段階で評価した（N=20）。

②目標の評価

ⅰ．高齢がん患者の治療および生活の場を踏まえた看護援助を考案できる（図１）

ⅱ．高齢がん患者と家族の意思決定を支える看護について説明できる（図２）

ⅲ．複雑な課題を抱える高齢がん患者に対して、既習した理論を活用した看護援助を考案できる（図３）

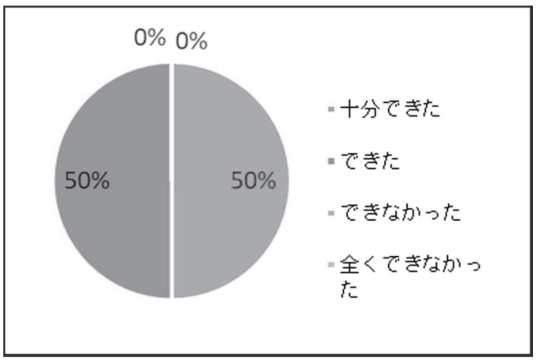


図１．高齢がん患者の治療および生活の場を踏まえた看護援助を考案できる

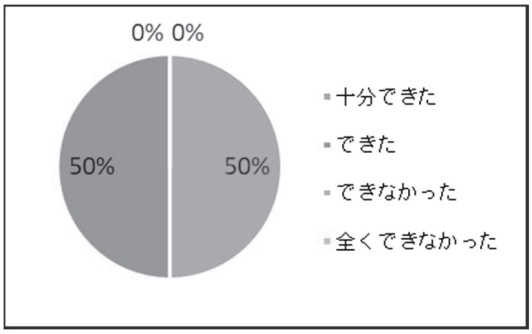


図２．高齢がん患者と家族の意思決定を支える看護について説明できる

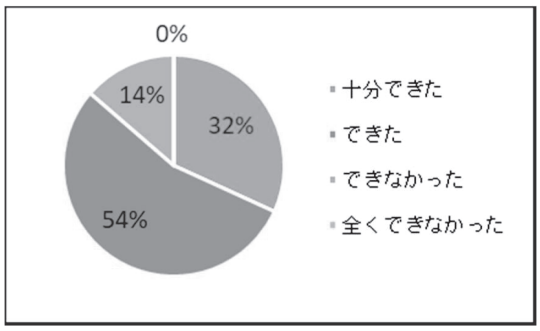


図３.複雑な課題を抱える高齢がん患者に対して、既習した理論を活用した看護援助を考案できる

③自由記載内容からの評価

自由記載欄への受講生の意見として、「事例を通して実際の患者の看護を再度考える機会となった．多くの専門分野の方の意見を聞きながら、実践につなげていけると感じた」、「プロセスや事例があり、より実践的に学習できた．意思決定については日頃から困難に感じることも多く、研究データを通して何に問題が生じているのか具体的に知ることができた」、「意思決定を支えるために、家族を含めた介入や生活スタイルを考案することなどを学ぶことができた」、「ＡＣＰについては学会等で知っていたが、その前の意思表明について知ることができ、ＡＣＰのハードルが下がった気がした」等、改めて理論や考え方を学ぶことができたとの回答が多数あった。さらに、「自分の行うアセスメントはまだまだ経験や感覚に基づくものであると感じた．今後は理論などを活用できるようにしたい」、「机上の患者ではなく、目の前の患者・家族に対して少しずつ実践につなげていきたい」、「今回の事例について既習したスケールを用いて、どういう基準で治療やケアを判断していくのかが明確になり、よりアセスメントを深めることができた」、「事例で援助計画を立案する作業をさせていただいたことで、これまでに学んできた評価ツールの活用や、高齢者の身体的特徴の捉え方について振り返りができ、とてもよかった」等、今後のより質の高い個々の実践に向けた前向きな評価が得られていた。

## Ⅵ．考察

本教育コースは、専門看護師や認定看護師を対象に、高齢がん患者のニーズに対応できる高度な実践能力を養成することを目的とし、理論や知識を実践に有用に活用する専門性の高い統合的アプローチを行う能力を培うためのプログラム構成を行った。ここでは、受講生が認定看護師の資格を有するという特徴を加味し修正を加えたプログラムによる教育効果、評価について主に論じる。

### １．修正されたプログラム構成の評価

経験豊富な看護師としての実践経験に加え、認定看護師の資格を有する対象者の特徴をふまえ、受講ニーズの分析結果に基づき、プログラム内容の改変を行った。これは、教育する側が全てを決定するのではなく、学習者と教育者が相互に意見を交わし、教育者の問いかけをとおして学習者自らの学習ニーズや価値観などを問い直し、意識変容の学習を進めていく相互学習のプロセス（米岡, 2011）を踏む結果となった。受講生の体験していた日々のがん看護実践上の困難は、患者の高齢化やがん治療の外来治療へのシフトといった我が国全体におけるがん看護実践の現状と共通する内容であった。しかし受講生の大半は、中小規模病院で勤務しており、中核病院であるがんセンターなどの人的・物的資源に恵まれた場所ではなく、受講生一人一人の力量とその成果ががん看護実践の全般において求められている実状があると推察される。そして日進月歩の医療の進歩と患者の超高齢化に伴い、新しい知識や技術の獲得を進める必要性を感じながらも、中央で開催される各種研修会へは地理的・経済的理由で困難が伴う。そのような中、中四国地区の本学で受講生のニーズをプログラムの具体的内容に反映させたことは、自由記載内容からの評価からも、受講生自身の学習への前向きな学習意欲と態度の形成に役立ったと評価できると考える。

プログラムの内容は、一般的な老年医学および看護に関する知識・理解を踏まえ、高齢者をめぐ

るがん医療と看護の理解と実践へと積み上げる構成とした（表１）。これらの内容は、受講生のもつ課題や学びへの期待の分析結果に示されていたように、新たな知識の獲得や高齢がん患者特有の具体的な援助技術の習得に向けての一助となったと考えられる。これは、高齢がん患者やその家族と関わる日々の看護の具体を、一般的な理論で振り返り、共通性や個別性をどのようにアセスメントしていくのかに繋げることができるという受講生の評価からも伺えた。

## ２．事例を用いた展開論の教育効果

改変した「高齢がん看護展開論」の授業内容の柱は、高齢がん患者への看護の特徴を有する３つの紙上事例を学習者が選択し、自己学習を踏まえたGW形式での学習としたことである。この、事例を用いた学習形式は、一昨年度本学で企画・開催した「高度実践看護師（APN）コース小児がんの子どものケア」（以降、小児がんAPNコース）における「小児がん看護展開論」の方法論を参考としたものである。小児がんAPNコースでは、講師が作成した援助モデルを踏まえ、事例に基づいて新たな包括的アセスメントを考案する形式をとった（有田ら,2019）が、本コースでは当初からGWでの進行として、メンバー相互で協力し事例を検討し、アセスメント、そして看護援助計画の立案へと学びを進める形式とした。これは本学大学院生の７名を加えて、20名を超える受講生が得られていたことと、認定看護分野が複数にわたっており、専門性の異なるメンバー同士でのグループ編成が可能であったことにより、今までのアセスメントや看護の視点とは異なる、他の専門領域からの視点を加えた学びと広がりを得られるのではないかと考えたからである。

自己の看護実践を省察し「臨床の知」として自らの身体化している看護の知恵や技を自覚していくことが、自らの専門性を高めることになる（永井,2010）といわれているように、紙上事例を客観的に分析し互いに意見を交わしながら、自分自身やメンバーの専門性に基づく実践や視座を自由に展開できたことは、結果として受講生の高い満足度へと繋がったと考える。

小山田（2007）は、中堅看護師の能力開発においては、内省のプロセスとして、看護実践の意識化、学びを生む体験、そして自己像の拡大の重要性を示している。本プログラムの受講生は、自らの実践を省察し、省察的実践家としての成長が求められている（永井,2010）。参加者が自らの経験を基盤に新たな学びを得て看護実践を振り返り、GWメンバーに考えを説明し共有していくプロセスは、看護実践の意識化となり、さらに安心して意見を交わすことのできるGWにおいて、自己肯定感の高まりや視野の拡大をもたらす結果となったといえる。

意識変容につながる学習は、再評価を必要とする前提の批判と、ゆがんだ前提や価値観の修正を含むといわれる（Cranton,1996）。今回のプログラム受講の後、受講生らは所属する病院において今までの認定看護師としての責任ある役割を果たしながら、高齢がん患者への看護実践に携わっていくこととなる。今回の内的な動機から参加した学習の機会は、それぞれが共通する課題に直面していることを認識しあい、解決に向けての話し合いを行うという貴重な時間となった。このことにより、キャリアを積んだ認定看護師として、単に新たな知識を獲得するだけでなく、物事に対してどのような前提をもち解釈しているのか、さらに価値観を互いに発言する中で問い直せる有用な機会となったとも考えられた。

## ３．高度実践家育成に向けての示唆

我が国においては、がん看護の対象として、今後高齢者が益々増加していくことは確実である。そのような状況は、受講生らの学習への意欲や取り組みにも反映されていた。世界に先んじて「超高齢化社会」に突入している中で、高齢がん患者へのがん医療・看護の標準化に向けての施策はようやく始まったところである。これから様々な資

料やデータが蓄積され、二人に一人ががんに罹患する社会のなかで、最期までその人らしく生ききることを支える高度実践家の育成が急がれる。がん看護専門看護師や、がん領域および高齢者看護に関わる認定看護師の数は着実に増加しているとはいえ、より高度な実践家としてのレベルを上げていくための継続教育の体系化は未だ図られていない。

中四国地区という高齢化率が全国平均よりも高い地域において、専門看護師や認定看護師の総数はそう多くはなく、施設においての限られた人的資源として、大きな期待を背負い日々奮闘している様子が伺える。今回受講生のニーズや期待を加味したプログラムを改変し実施した結果として、既知の考えや実践経験を振り返り、新たに獲得した知識を実践に生かすことに前向きに取り組もうとする意識が得られたのではないかと考える。実践家としての資格を得た後にも、継続して他の実践家と忌憚のない意見を交わすことのできる本プログラムのような機会を定期的に設けることは、看護実践家自らが各自の能力を開発する刺激となり、また互いの能力を認め合うことで自己肯定感を強化し、日々の実践を継続するうえでの支えとなる可能性があると考える。

## Ⅶ. おわりに

本プログラムは、今後も２年間、「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル、以下がんプロ）」養成プランによる「高度実践看護師（APN）コース」において、がん看護の対象を変えながら引き続き開講する予定である。今回のプログラムにおける教育の効果や評価から得た課題をがんプロメンバーで検討し、より洗練化した教育コースを実施していきたいと考える。

## 文献等

中国・四国広域がんプロ養成コンソーシアム（2017）．文部科学省平成29年度 多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン採択 全人的医療を行う高度がん専門医療人育成，http://www.chushiganpro.ccsv.okayamau.ac.jp/index.html（2019/09/01）

公益財団法人 長寿科学振興財団（2019）．健康長寿ネット 高齢者がんの統計 https://www.tyojyu.or.jp/net/topics/tokushu/koureisha-gann/gann-toukei.html（2019/9/1）

有田直子，藤田佐和，森本悦子，門田麻里，庄司麻美，吉岡理枝（2019）．「高度実践看護師（APN）コース」における小児がん看護援助モデルを活用した教育効果，高知県立大学紀要看護学部編，68．41-49．

米岡裕美（2011）．日本における成人教育方法論の構造に関する一考察，京都大学生涯教育学・図書館情報学研究，10，75-84．

永井睦子（2010）．看護教育における省察的実践理論の展開，日本プライマリ・ケア連合学会誌，33（4），427-430．

小山田恭子（2007）．中堅看護師の能力開発における「ナラティブを用いた内省プログラム」の構築に関する基礎研究，日本看護管理学会誌，11（1），13-19．

Cranton，P.（1996）．入江直子，三輪健二監訳（2004）．おとなの学びを創る－専門職の省察的実践をめざして－，鳳書房，東京．